ロシア・東欧学会　2012年の活動報告

ロシア・東欧学会事務局長 兵頭慎治（防衛研究所）

１．4学会合同大会の実施

　2012 年度（第41 回）の研究大会は，10 月6 日(土)・7 日(日）に同志社大学今出川校地新町キャンパス（京都市上京区）にて実施された。JSSEESとの合同大会を継続するとともに、日本ロシア文学会、ロシア史研究会を加えた４学会による共同シンポジウムや合同懇親会が企画された。４学会合同大会は、2008 年にロシア・東欧学会が名古屋で主催して以来、2 回目である。ロシア史研究会を除く3 学会が同一会場にて独自大会を開催したことから、大会プログラムは変則的となり、独自大会も一部短縮して実施された。4年に一度の4学会合同大会であること、4 学会の関係者が他学会のプログラムにも自由に参加できたことから、例年より参加者が増大するとともに、4学会共同シンポジウムや合同懇親会も大変盛況であった。この4学会合同大会を通じて、関連するスラブ学会の連携強化を図ることができた。

２．2012年度（第41回）研究大会の開催

４学会共同シンポジウムの「リーダーとリーダーシップを作るもの」というテーマを受けて、独自大会の共通論題は「ポスト共産時代のリーダーとリーダーシップ－東欧と中央アジアで考える－」というテーマが設定され、4学会合同大会と独自大会の間で、企画内容の有機的な連携が図られた。自由論題では、分科会１で言語、歴史、文学に関する４報告が、分科会２では北欧、東欧に関する３報告が、分科会３では現代ロシアに焦点を当てた４報告が行われた。学際的な地域研究学会ならではの多彩なテーマが取り上げられ、討論者・フロアーとの間で活発な質疑応答が行われた。今年は、若手研究者による報告申込みが相次いだだめ、件数を調整する必要が生じた。

３．新理事の選出と執行部の留任

　総会において、新しい理事が承認された。当学会では、半数の理事を選挙で選出し、選挙で一定の得票を得た会員を対象として、専門分野や年代、性別、地域などを総合的に考慮して、選挙の当選者が残り半数の理事を選考する方法を採用している。今回、理事の4分の1が入れ替わることで世代交代が進み、学会運営に新風が吹き込むことが期待される。他方、上野俊彦代表理事（上智大学）、溝端佐登史（京都大学）、兵頭慎治事務局長（防衛研究所）の執行部は留任し、実務面での継続性が図られることとなった。

４．若手研究者に対する支援事業

　2010年から導入した若手研究者に対する支援制度は、年を追うごとに定着しつつある。まず、学会誌に掲載された40歳未満の会員による論文のうち、査読評価の高いものなどを対象として、5名の理事が研究奨励賞の選考を行っている。総会では、第3回目の受賞者が発表され、賞状と副賞（5万円）が授与された。研究奨励賞を導入するようになり、若手研究者による学会誌への投稿論文が増加するとともに、論文の質的向上が期待されている。さらに、研究大会で報告する院生会員に対して、旅費・宿泊費・懇親会費の支給を行っており、今回も若手研究者がこの制度を利用して優れた研究報告を行った。財政面に余裕があるため、若手研究者に対する支援事業は今後も継続していきたいと考えている。